かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第２３号（令和元年１０月）

百姓一揆の牧野村庄屋屋敷跡

あゆむ「また、牧野に来たぞ。」

ミドリ「前は、六面幢などを見にきたけど、今日は、すっかり秋のふんいきで、またいいわね。」

あゆむ「この前来た時、気になっていたのがここにある大きな石碑だった。今日は、これの話なんだよな。」

ミドリ「“五なんとか神社”と彫ってある。この字、何と読むの？」

文じい「“ともえ”と読む。からまってくるくる回るような様子を表しておるの。」

ミドリ「“いつつともえ神社”というわけね。」

ふみお「五つの何かを表しているんだね。」

ミドリ「説明板があるわ。あ、説明の字の上に薄く描かれている絵が、“五巴”ね。それに、この説明で何の神社かわかるわね。長い文だけど、がんばって読んでみない？」

ふみお「えーと、五巴神社由緒。由緒というのは、歴史というような意味かな。江戸時代の延享4年(1747)の時だ。今から 270 年以上も前のことだな。天候が悪く、冷害、つまり、寒くて米がよくとれないという凶作だったようだ。」

ミドリ「生活は大変になったわけね。」

ふみお「ところが、人々をおさめていた上山藩では、重い税でおさめなければならない状態だった。人々は苦しんできていた。 さらに、よそから米が入らず、米の値段も上がっていたという。」

ミドリ「え、それじゃみんなが困るんじゃない？」

文じい「ふむ。米が高くなった時に、売ってもうけられるのは、米を買い集めている金持ちの商人たちだ。」

あゆむ「なるほど、そのやつらだけがいい思いをしてたんだな。悪いやつらだ。」

ミドリ「訴えなければならないわね。」

文じい「ところが、そのころは、そのようなことは難しかった時代なのじゃ。」

ミドリ「そういえば、代官様に訴えても、聞いてくれないどころか、悪い商人と手を組んでさらに人々を困らせるというようなドラマをよく見るけど、それと同じじゃない？」

あゆむ「そうだな。 それで、人々は？」

ふみお「たえきれなくなった人々は、とうとう2ヶ所で立ち上がった。」

あゆむ「えっ、それで？」

ふみお「初めは、5 月 13 日。十日町などの町人たちが 300 人ほどで、悪い商人たちの家に侵入し、打ち…？」

文じい「“打毀”で（うちこわし）と読む。字のとおり、家などをおそって、金や米などを出させるような騒ぎのことじゃ。」

あゆむ「もう一つは、どうなった？」

ふみお「今度は、5月16日。“見ル目原百姓一揆”が起こったんだって。」

あゆむ「“みるめがはら”というのは？」

文じい「西郷地区と本庄地区の間あたりじゃな。」

ミドリ「“百姓一揆”というのは、どういうもの？」

文じい「一揆というのは、気持ちを一つにしてまとまり行動することじゃ。百姓一揆ということは、農民たちが大勢まとまって抗議するために立ちあがったということじゃな。」

ふみお「集まった人数は、約3,000人だって。」

ミドリ「打ちこわしの時の10倍だわ！」

ミドリ「“立ち上がる”とかんたんに言うけど、大変な覚悟がいるはずだわね。」

文じい「そう。この時代では命がけのことじゃ。」

あゆむ「それで、どうなったの？」

ふみお「お城の方から、家老の山村が、3 名の使者をつかわしたようだね。」

文じい「ここに書いてあるように、家老、山村縫殿助が、役人の神尾忠右衛門と大庄屋の山田藤右衛門、それに、御典医、つまり、お城のかかりつけ医者である宇留野春庵をつかわして、話し合いに当たらせた。春庵は立派な医者で、人々に慕われておったようだ。それでつかわされたのじゃろう。」

あゆむ「それで、どうなった？」

ふみお「百姓の願いをなんとか聞き入れ、金や米も与えるということで落ち着いたらしい。」

あゆむ「よかったな。でも、説明板にはさらにいろいろ書いてあるけど…？」

ふみお「うん。この事件はこれだけで落着しなかった、つまり、おさまらなかったということなんだ。」

ミドリ「なんだか、いやな予感がするわ。」

ふみお「うん。その後、責任者が追及されたとある。そして、きびしい“拷問”を受けたようだ。」

ミドリ「“処刑”という字も見えるわ。」

あゆむ「処刑？ いったいだれが…？」

ふみお「打ちこわしや一揆を進めた、5名の方の名前が書いてある。」

ミドリ「えー！　それって、どういうこと？」

あゆむ「百姓や町民が悪かったわけじゃなかったのに！」

文じい「そういう時代だったと言うしかないの。」

ふみお「でも、要望したものは通ったんだよね。」

ミドリ「どういう要望だったのかしら。」

文じい「税である年貢をつり上げないで、今まで通りにすること。米をよそに売って、米不足によって値段が上がるようなことはやめること。木のえだや根などを百姓にも下さるようにすること。役人がむやみに村にやって来て、もてなしなどを受けるようなことはひかえるようにすることなどじゃ。」

あゆむ「なんだか当たり前のことを言っただけじゃないか？」

ミドリ「そうだよね。その当たり前のことを要望するのに立ち上がって、尊い命が奪われたのね。大変なことだわ。」

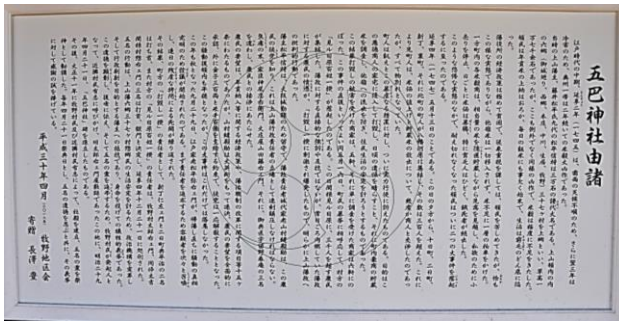
文じい「5名の方々は義民、つまり、人々のために自分の命をかけた方となるが、きびしいこの時代では、その霊を弔うこともできなかったのじゃ。」

ふみお「だから、明治の時代になって、村民がこの碑を建てた。そして、さらにその後、庄屋で犠牲となった太郎右衛門屋敷跡に神社を建てて、5人の霊を弔ったと書いてある。」

ミドリ「それで、五巴なのね。」

あゆむ「石碑は、大事なことを伝えてくれていた。」

文じい「まったくじゃの。きびしい時代に生きたこのような人々の覚悟と努力の上に、今の私たちの生活がある。そのことを考えながら、しっかり手を合わせお参りしなければの。」



説明板「五巴神社由緒」

発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）